

アンニバレ・カラッチによる版画の利用

—ファルネーゼ宮“カメリーノ”天井装飾をめぐる—

渡辺晋輔（国立西洋美術館）

アンニバレ・カラッチ（1560–1609年）がモチーフあるいは構図の着想源として版画を活用したことは、いくつかの作品について指摘されている。彼は兄アゴスティーノを通じて版画に親しんだと考えられる。ただし、これまでの研究は通常版画からの引用の一つ一つを指摘するに留まっており、それゆえ、制作プロセスのなかで彼が版画をどのように利用し、またいかにして自らの創意を付け加えたのかということについて、詳細には論じられてこなかった。本発表は、ローマのファルネーゼ宮にある所謂カメリーノ（“小部屋”の意）の天井装飾（1595–96/97年）のうち、フレスコ画の一場面《天球を支えるヘラクレス》および、かつて天井中央に配されていたカンヴァス画《分かれ道のヘラクレス》（カポディモンテ美術館）を取り上げ、アンニバレが着想源とした版画数点を新たに提示するとともに、版画と準備素描、完成作を比較することにより、版画をもとにしながら彼がどのように発想を展開したのかを考察する。

《天球を支えるヘラクレス》は、中心のヘラクレスを挟んで、左右に二人の天文学者が対称的に配されている。ところが準備素描を見ると、二人の姿勢は完成作とは若干異なり、やや対称性に欠ける。一人の天文学者については、カラーリオの版画からの引用であることがすでに指摘されているが、もう一人についても、ギーゼもしくはパッセロッチの版画からの引用であることを新たに指摘したい。つまり画家は、準備素描の段階では、二つの異なる版画を引用しながら異なる姿勢で二人を描いたのだが、完成作に至るまでに二人の姿勢を調整し、対称性を際立たせたのである。

《分かれ道のヘラクレス》はアンニバレの代表作の一つであると同時に、パノフスキー（1930年）が論じたように、以後この主題を描く作品すべてがアンニバレの構図を踏襲したことからも、美術史上重要な位置を占める。パノフスキーは構図の着想源を古代ローマの浮彫《ヘスペリデスの園のヘラクレス》（ヴィラ・アルバーニ）とし、アンニバレの作品によって古代の造形理念が後代に伝わったと主張している。この見解はほぼすべての研究者によって踏襲されてきたが、本発表はそれを否定し、構図の新たな着想源として、マルコ・デンテの版画《バラの棘に傷つくウェヌス》を提示する。二作品は全体の雰囲気は共通するほか、アンニバレ作品の準備素描の細部が版画と酷似していることから、関係が証明される。画家は版画にもとづきながらも、人物の向きや姿勢に修正を加え、（おそらくは版画を引用した）新たなモチーフを付け加えることで、デンテの版画とは異なる図像内容を持つ作品へと仕上げたのである。

アンニバレは版画を積極的に着想源として使用していた。しかしこのことは、彼の創意が劣っていたことを意味するものではない。彼は、時にモデルに版画のモチーフのポーズを取らせてスケッチを重ね、古代美術の研究を反映し、構図やモチーフに変更を加えることで、借り物ではない自らの作品を作り上げたのであった。